

生涯発達における子ども時代の体験の意味

—40年にわたる生涯的縦断研究からの提言—

藤崎眞知代¹⁾・杉本真理子²⁾・石井富美子³⁾・斎藤富美子⁴⁾・中村美津子⁵⁾・永田陽子⁶⁾
太田茂行⁷⁾・小林順子⁸⁾・伊東真理子⁹⁾・鈴木晶子¹⁰⁾・藪部南海子¹¹⁾

1) 明治学院大学, 2) 帝京大学, 3) 立正大学, 4) 元戸板女子短大学生相談室, 5) 元和泉短大, 6) 北区子ども家庭支援センター, 7) 生活心理相談ナワーク, 8) 国際医療福祉大学クリニック言語聴覚センター, 9) 富山市教育センター, 10) 江戸川区立堀船幼稚園, 11) 多摩市子育て総合センター

<要 旨>

子ども時代をいかに過ごすかは、その人の生涯にわたる発達の基礎として息づいていくにもかかわらず、現在わが国では危機的状況にあると思われる。我々は1965年に出生前の母親面接を開始し、生まれてくる子ども達の生涯的縦断研究に着手した。研究者と協力者がともに一回限りの人生を歩むものとして対等であり、互いにかかわり合うことでそれぞれの成長があると考え、協力児の5歳時から15年間にわたり人間関係探求の場 (Human Relationships Laboratory) として毎夏1週間程度の中里キャンプを行ってきた。それは日常とは異なる時空間でのノンプログラムのキャンプであった。本研究では協力児たちが40歳を超えた今、彼らが子ども時代を振り返り、キャンプでのどのような体験が現在の自分の生きる基盤、そして自らの子育ての指針となっているのかを、彼らの語りと記述を通して検討した。その結果、常識を押しつけずに子どもに寄り添う研究スタッフのあり方から、子どもらしい子ども時代の体験として①自己決定と自己実現が十全に支えられること、②打算のない仲間との出会いがあること、を保証するために、特に③子どもと関わる「大人自身のあり方」を吟味し続けること、の3つの提言に至った。

<キーワード>

生涯的縦断研究、研究者・協力者関係、語り、対話、質的分析

【はじめに】

人の生涯発達が謳われるようになり、発達過程に迫るべく国内外で多くの縦断研究が行われてきている。しかし、その主たる目的は研究協力者を第3者的に調査した資料から、発達の变化やその要因に関する客観的な見解を導き出すことであり、研究者・協力者関係について真正面から検討したものは少ない。長期の縦断研究では、研究協力者のみならず研究者自身も人としての発達を遂げていくのであり、研究者と研究協力者との関係自体も変化していくことになる。それゆえ研究者は第3者的な存在ではあり得ず、ともに生きていくという姿勢が不可欠であろう(古澤, 1995; 藤崎・古澤, 2009)。

古澤ほかは、1965年から「母子関係の形成過程に関する研究」(古澤, 1966)の縦断研究に着手した。そこでは研究者も協力母子も、そ

れぞれ1回限りの人生を歩んでいることを踏まえ、研究者・協力者双方に意味ある関係を築こうとしてきた。研究者・協力者関係はまず、子どもの乳幼児期に親から支援を求められたこと等により親子に役に立つことを中軸におくものへと変化した。そして、子どもの幼児期には定期的な子どもグループ(プレールームでの触れあい)、不定期での日帰りハイキング等と母親グループ(古澤と母親とのノンプログラムでの話合い)、5歳時点(1970年)から児童期にはデイキャンプ、中里キャンプ(詳細は後述)、青年期には中里キャンプを行ってきた。また、子どもの児童期から青年期にかけては不定期な母親グループ(古澤と他の研究スタッフと母親とのノンプログラムでの話合い)を、成人期には不定期な子どもとスタッフとのミー

ディングを行ってきた。一方、研究者およびスタッフはこうした親子との触れあいと平行して現在までの40年以上にわたり定例会、合宿等を行ってきた。

これらの活動のなかで「中里キャンプ」は、「大人の心的展開なくして子どもの成長はない」という命題のもとに、「日常と異なる時空間」において、子どもと研究者スタッフが3泊～7泊のノンプログラムの生活をする「人間関係体験の場 (Human Relationships Laboratory、通称HRL、以後HRLと記す)」として位置づけられる。この「日常と異なる時空間」とは、子どもが自ら行動するには時間がかかること、しかも子どもが自分を一番表現できるのは機能が明確でない中間的場において子ども自身が一日の過ごし方を決めることができる場である、というベッテルハイム(1968/1965)に基づく。実際には自然に恵まれた山里にある、廃校となった小学校跡の再利用として、3教室分の広間に畳が敷かれた居室空間と自炊や入浴設備のある群馬県多野郡中里村魚尾長寿園(現在は群馬県多野郡神流町となり、長寿園の跡地は町営の集合住宅となっている)をHRLの生活の場とした。中里キャンプの特徴は創設の命題にもあるように、子どもがやりたいことを実現できるように、①毎日がノンプログラムであり、スタッフはもっぱら一人ひとりの子どもを支えることに専心し、②ルールといえるのは命の危険を避けることのみであり、③キャンプ期間中は無論、事前・事後においても子ども理解に関するスタッフ・ミーティングを十全に行う、ことにあった。このスタッフ・ミーティングでは、子どもとのエピソードを通して主に子どもと関わる際の研究スタッフ自身の枠組みが問われる一方、沈黙する自由も許され省察することも意図されていた。

このようなノンプログラムの中里キャンプは、その後、子どもたちが大学生に至る1985年まで毎年実施された。幼少期では主に研究スタッフと子どもとの1対1の触れ合いが、思春

期では子どもたちが「モルモットではないか?」といった疑問をもち研究スタッフを排除して子ども同士の触れ合いが展開した。しかし、こうした疑問に対して我々はあえて応えなかった。長寿園の施設使用が困難になった後も、子どもたちが社会人となり、さらに独立して親となった成人期に至っても、研究スタッフと子どもたちとの触れ合いは継続され、現在、40歳代となった子ども世代協力者とは対等な関係へと進展している。これまでの我々の縦断研究として行われてきた活動の流れは図1に示す通りである。

ところで、人の発達を論じる場合、発達を捉える指標としては「行動」が取り上げられ、時間経過に伴う「客観的な行動変化」に依拠した知見が積み上げられてきている(古澤・藤崎・赤津・柏木、1991;菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井、1999; Sroufe, Egeland, Carlson, & Collins, 2005等)。しかし、特に思春期以降においては表出される行動は多岐にわたり、またその意味も一義的ではなく、行動を指標とすることの難しさや限界がある。それゆえ行動に替わる指標として、発達者自身による捉えがどのように変化していくかをみる「意識による捉えの変化」に依拠して論じることは有効なアプローチであると考え。すなわち、時間経過を踏まえて発達者自身の振り返りや記述を繰り返し、ライフ・ヒストリーの全体に位置づけ、時間経過に伴う捉えの変化として発達を論じることが、特に生涯的縦断研の方法論的展開として重視されるべきであると考え。図1で示したように、子どもたちが20歳となったときに、それまでの中里キャンプにおける我々の試みについて、研究者と子ども世代協力児がそれぞれの立場から振り返り、『見えないアルバム』(古澤、1986)としてまとめた。それはあくまでも子ども達が20歳という青年期での振り返りであり、研究スタッフも20歳代から40・50歳代の時点での振り返りであった。それからさらに時間は経過し子どもたちは社会人と

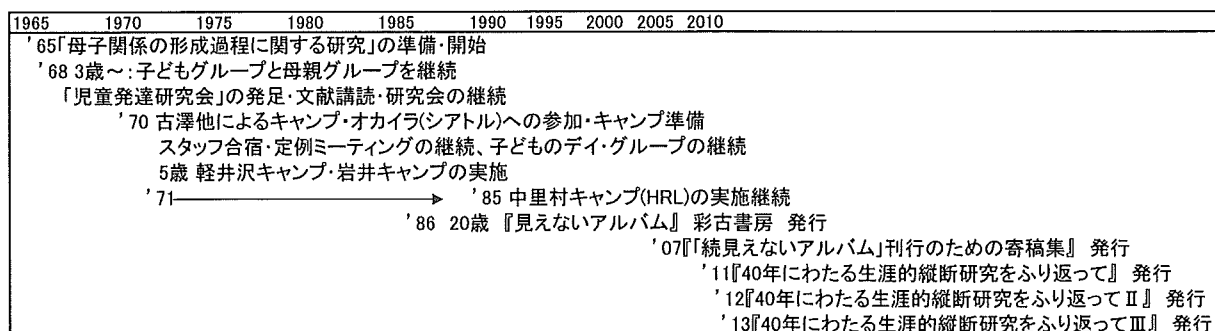


図1 これまでの研究の流れ

なり、独立し、親となるなど、40歳代としてのライフ・ヒストリーを歩み続けている。それは研究スタッフについても同様である。

子ども時代における中里キャンプの体験の意味は、子どもと研究スタッフそれぞれのライフ・ヒストリーに位置づけ、「意識による捉えの変化」としてみることにより、子どもと研究スタッフの関係の質的転換を含めて明らかになると考える。それは質的心理学において研究対象へのアプローチとして、インタラクション、文脈、意味、そして変化プロセスを重視するといった「質的」方法論に繋がるものである(やまだ、2012)。

したがって、中里キャンプを中心とする本縦断研究において子ども世代協力者が40歳代となった時点で、①必然的に研究協力児となった子ども世代はその事実をどのように受け止め、子ども自身がより積極的な参加者へと移行した心理的変化の要因は何か、②子ども世代が長じて親となり子育てをするなかで、HRL体験からどのような影響を受けていると捉えているのか、さらに、③研究者やスタッフ自身も研究協力者との関係や研究スタッフ間関係のなかで、どのような影響を受けてきているのか、をそれぞれの立場から語り事例的に検討することは生涯的縦断研究の展開として意義深いと考える。

そこで、本論文では以下の3点を明らかにすることを目的とする。

①親世代が研究協力者になったことにより、必然的に研究協力児となった子ども達にとって、縦断研究の一環として行われた中里キャンプにおいて体験したことの意味について、思春期・青年期、成人期に至り、その捉え方がどのように変化していったかを検討する。

②研究スタッフとして参加した者が、中里キャンプや定例会において体験したことの意味は、その後の人生の各時期においてどのように変化していったかを検討する。

③上記の検討を通して、研究協力児・者としてHRLにおいて体験したことの意味と研究スタッフのあり方との関連性を吟味した上で、子ども時代の子どものらしい体験とは何か、また、そうした体験を保証するための大人と子どもとの関係や環境のあり方を吟味し提言する。

【方法】

1. 研究協力児(者)に関して

対象：1965年から継続してきた子ども世代協力者7名(男性4名、女性3名)。

手続き：1) 自伝的記述：2007年に①親の意志のもとで誕生と同時に協力児であったことをどのように受け止めてきたか、②子ども時代の中里キャンプ体験をどのように捉え、それが現在の自分にどのように関わっているか、について自由形式での記述を求めたものを「『続見えないアルバム』刊行のための寄稿集」にまとめた(杉本・上野、2007)。

2) グループでの子ども世代協力者と研究スタッフとの語り：2011年1月、2012年1月、2月、6月、9月、11月、2013年2月に中里キャンプの資料を参照しつつ、当時を振り返りながら、自らの体験について集中的に研究スタッフと語り合う機会(総計約30時間)をもった。語りは全て録音し、後日、逐語記録として文字化した。

これらの資料から子ども世代協力者の記述や語りを事例的に分析し、HRL体験の意味に関する共通性を抽出した。記述や語りからの共通性の抽出および意味づけは第一、及び第二著者の合議による。

2. HRLのスタッフに関して

対象：研究開始当初からそれぞれの時期に研究スタッフとしてHRLに参加し、現在も研究スタッフとしてHRLの活動に参加しているもの12名(40歳代1名、50歳代3名、60歳代8名)である。研究職、学校教育職、臨床職、一般職に従事している者のほか、すでに退職した者もいる。

手続き：1) 自伝的記述：2007年にHRLと自分とのかかわりについて自由形式での記述を求めたものを「『続見えないアルバム』刊行のための寄稿集」にまとめた(杉本・上野、2007)。

2) スタッフ間での語り、および記述：2009年4月から毎月1回の月例会(約3時間)、および2009年9月、および2010年11月の1泊2日の合宿において研究スタッフ各自が生い立ちから振り返りHRL体験の意味について、その変遷を含めて一人約1～2時間にわたり語った後、スタッフ間での対話が展開された。それらの語りと対話は全て録音し、後日、逐語記録として文字化した。この逐語記録をもとに、研究スタッフはさらに自身の語りや対話内容に基づき、自分史のなかでのHRL体験の意味を再吟味し、文章化したものを2011年度～2013年度にかけて「40年にわたる生涯的縦断研究を振り返って—研究者・スタッフの体験の意味」「同Ⅱ」「同Ⅲ」として冊子にまとめた(藤崎・杉本、2011；藤崎・杉本、2012；藤崎・

杉本、2013)。

研究スタッフにとっての体験の意味内容を事例的に分析し、第一および第二著者の合議により、その共通性の抽出と意味づけを行った。

本論文では、これらの資料のほか、2009年に親世代協力者に対して実施された母親自身が研究協力者となったことによる影響に関するアンケート調査結果も含めて、研究協力児(者)にとってのHRLの体験の意味について、研究スタッフのあり方との関連性から事例的に検討していく。

【結果】

1. 子ども世代協力児(者)にとってのHRL体験の意味

自伝的記述、グループでの語りにおいてHRL体験の意味として表現された共通性は、①制限なくやりたいことができる場、②常識を押しつけず寄り添ってくれる大人、③太い絆で結ばれた特別な仲間、④それぞれの人生の中でHRLは生きている、の4項目であった。以下、具体的な記述や語りを事例として示し、()内は話者を表す。

1) 「制限なくやりたいことができる場」に関する記述と語り

記述と語りの例：例1：キャンプでの自由な生活というもの、過保護であったことは間違いない私の両親の保護の下での毎日とは180度違うものだった。何をしても良くて何もしなくても良いキャンプだったのに、何もしていない瞬間ってまったくなかった気がする(KK)。例2：自分たちのやりたいようにやってきた。自分達だけで考えて行動することや反発することを許されていた。危険があろうとなかろうと、やりたいと思うことが何でもできる。今考えるとあり得ない冒険だ。死ぬほど楽しかった(AH)。例3：学校も、家でも母親が過干渉で厳しく、してはダメなことが多かった。3人兄弟の一番上で、甘えた記憶もない。そんな中で、小学校低学年から、何でHRLに来ると開放感があるんだろうって、すごく感じていた。HRLがなかったら、どこで息抜きしてたんだろうと思う。HRLでは、皆自由気ままにされていて、HRLの記憶って今も懐かしい(ST)。例4：学校では早生まれでついて行くのが大変だった。HRLでは、辛いと思ったら、行かなくていいんですけどすごく楽だった。みんなと一緒にやらないで、マイペースでいいということすごく楽。みんなが山登りに行く時、長寿園にいてもいいんだ。ただ川につかっているだけでもいいんだ。誰もいなくなった長寿園で、スタッフはお茶を飲みながらまったりしてて、私もまったりしてて。アクティブにしなくてもいいんだという感じですごく楽(MY)。

子どもたちにとっては、都会の日常を離れて豊かな自然のなかでの生活は、親からも学校からも開放され、自分の足で歩き、目で見て、手で触れる実体験であり、ひたすらやり

たいことをやりたいだけやれる一方、何もしなくてもいい場であったことから、自己決定が認められ、自分が尊重された体験となっていた。

2) 「常識を押しつけず寄り添ってくれる大人」に関する記述と語り

記述と語りの例：例1：HRLのスタッフって、その(一般的)規準をもたず、私たちの世界観で話しをきいてくれた気がする(KK)。例2：通常の社会生活のなかで行ったら必ず叱られてしまうような行為を行っても、決して叱らない大人達。我々がやりたいことをやれるように努力してくれて、一緒にいてとても楽しかった(AH)。例3：ありのままの自分を受け止めてもらえた体験をさせてもらえたことは、すごく救われたと思っています(KT)。例4：常に勝手にやっているけれども、常に見てるスタッフがいるっていうのは分かる。絶対誰かが見てくれるっていう安心感はあった(MY)。

スタッフは普通の大人とは違い、常識を押しつけずに決して怒らず、共に遊び冒険し、しかも時には寄り添ってくれる存在であったことから、子どもたちはありのままの自分を受け入れてもらえたという感覚をもっていった。

3) 「太い絆で結ばれた特別な仲間」に関する記述と語り

記述と語りの例：例1：HRLの仲間は、一言で言えば“幼なじみ”。お互いの良い所・悪い所をしっかりと受け入れて、喧嘩をしようが離れて暮らそうが、みんな太い絆で結びついている(AH)。例2：学校は逃げられない世界だけれど、HRLは行きたくて来る仲間なので、全然違う(MY)。例3：HRLの友達は、小さい頃を知ってる、生活をずっと共にしてるから、学校の友達とは違い、自分の内面を深く話し合えることができる(KT)。例4：中学1年の時、みんなで車座になって徹夜して色んなことを話し合った。すごく面白くて、HRLの友達への見方が変わっていった(KT)。

先入観のない出会いの場であり共にある生活であったことから、子ども時代では親元を離れて寝食を共にした仲間、心ゆくまで遊んだ仲間であり、学校の友達とは違う幼なじみであった。思春期以降では、大人を排除し急速に絆を深めた仲間であり、何年隔たりがあっても再会した瞬間に打ち解けられる仲間であり、お互いに掛け替えのない存在となっている。

4) 「それぞれの人生の中でHRLは生きている」に関する記述と語り

記述と語りの例：<仕事の場できている>例1：外部指導員として吹奏楽部の部活の指導をしています。生徒達にとって、私は大人だけれど学校の先生とも親とも違う存在、という面ではHRLのスタッフと似ています。HRLがなかったら、こういう接し方はしていなかったかもしれない。それどころか、こういう仕事をしていなかったかもしれない(MY)。例2：経済効率だけが重要視されている中で、中里の思い出がダブった。自分で面白いこと、やりたいことを、実現する。一切反対がない。HRLの考えがまだ自分の中

にあるので、何とか形にしちやおうっていうふうによく動く(NM)。例3：前の職場で子どもと遊んだり、今の職場で障がい者の介護をした後、あの行動の意味はどうなんだろうとか、どうしていつもあれを持っているんだろうとか、そういうことを話し合ったり考えたりした。HRLでしてきたこと、前の職場で学んできたこと、今の仕事、不思議とみんなつながっている(KT)。

<子育てに生きている、そして未来の世代へ>

例1：自分の子どもにはHRL的に、なるべくあまり言わず、のびのびと自由に育てようと思っています(ST)。例2：子ども達に伝えたいことは、すべて中里村から学んだ。次女の話「そうなんだあ」って聞いていられること・・・それが私のHRL効果かな(KK)。例3：子育てに関して、子どもが無茶しても意外と平気でやらせる。重症を負わせない程度のケガを負わすようにやっていた。軽いケガをいっぱい負わせました。伸び伸び育てて、お父さん大好き子が2人育ちました(AH)。

<人生、生き方の中に生きている>例1：あの時感じた自由感や達成感が、僕の心の尺度になっている。幼心にしっかりと植えつけられたバイタリティーの種は、僕の中で着実に育っているような気がする(NM)。自分と違う価値観を認めたり、理解したりする。人と折り合いをつける、起こった事柄に対して、自分が折り合いをつけていく訓練の場としてHRLは機能していた。家庭、学校、地域でもある程度はできたけど、HRLが一番。HRLから学んだこと(NM)。例2：HRLでの体験、特に毎年夏に行っていた中里村での体験は、それだけを切り離して語ることが難しいほど自分の人生の大切な一部となっています(KT)。例3：これからの先の人生も、自分で意識しない中で、「HRLの基本」に気づけられながら、生きていくんだろうと思います(UM)。例4：HRLにはいろんな人がいて、いろんな人の生き方見て、疑似体験ができる。人生をいくつも知っている(MY)。例5：自分は、人間関係の相談を受けやすいタイプだ。アドバイスが的確にできる場合が多かった。ちょっと話を聞いただけで、タイプが見えてくる。これは、HRLで様々な仲間や大人を見てきたからだと思う(AH)。

常識を押しつけずに寄り添ってくれる大人たちの存在により、やりたいことを実現し、太い絆で結ばれた特別な仲間たちとの出会いは、その後、仕事の場で、子育てのなかで、そしてそれぞれの人生、生き方のなかで生きている、と語られていた。

2. 研究スタッフにとってのHRL体験の意味

個々の自伝的記述に表現された共通性は、①自分史を含めて語ることの必然性、②HRLにおける振り返りのプロセスから中里子どもキャンプの特徴の明確化・構造化、③「大人の心的展開なくして子ども成長はない」、の3項目であった。以下、具体的な記述を事例として示し、()内は話者を表す。

1) 「自分史を含めて語ることの必然性」に関する記述

記述の例：例1：生涯的縦断研究とは、子ども達に限定されることなく、スタッフの生涯発達もあるのだということに気がついた。私の人生そのものに生きている(SF)。例2：物事は自分とは関係のないことではなく、自分に関わるか、関わらないかは、その時の自分が決めていることである(SM)。例3：身体と心にしみこんでいるHRLの感覚を財産としながら、日々の面接で、様々な年代、職種の人々にお会いし続けている(IM)。例4：子どもも大人も、長い時間で見ると確実に成長していけるという確信、人への絶大な信頼感のようなものを、HRLに参加し続けてきていただいていたような感じがしている(SM)。

研究スタッフとして子どもとの触れあいを振り返ることは、各自のアイデンティティ形成に大きな影響を及ぼしていた。また、その影響は単にHRLに参加している時のみの体験として切り取られるのではなく、必然的に自分史を含めた語りとなることが各個人内で明確にされていた。

2) 「HRLにおける振り返りのプロセスから中里キャンプの特徴の明確化・構造」に関する記述

記述の例1：例1-1：HRLの考え方、行動方法は、まさに私のそれまで培った枠組みに揺さぶりをかけたともいえる(SF)。例1-2：その人がもっている心の形の枠を広げること、その人の意識・無意識の常識の幅を広げて行くこと、というような感じではないか、と受け止めている(KY)。

記述の例2：例2-1：HRLの経験は、そのものが対象になり、全体性の中での意味が問われてくる(IM)。例2-2：10年・20年の歳月の中で、自分の「生涯発達」とともに身に沁みていった(IT)。

記述の例3：例3-1：長く広く深い眼差しで、目の前の子どもの行動の意味を捉えていくことが、とても大切だと思い知った(IM)。例3-2：目の前にいる人のために何かするとすれば、その人とのやりとりの中でみつけていく、生みだしているということが大事だと感じた(SN)。例3-3：長い臨床経験をもつ先生が子どもやスタッフを温かく見守り、私にもさりげなく声をかけてくれた。他者に添ってもらった経験をして、他者に沿うことを鍛えられてきた(NY)。例3-4：「スタッフである」と、「スタッフになる」とは違う。8年前、HRL中里キャンプに置いてきた「スタッフになる」という課題に(仕事でのダイケアで)再会した(SN)。例3-5：(ミーティングでは)黙っている自由から自分を開く作業をしてきたと思う(NY)。

スタッフ一人ひとりの振り返りには、記述の例1のようにそれぞれの生い立ちの中で、無意識的・意識的に持っていた「枠組み」が揺さぶられていくプロセスであったことが示された。さらに記述の例2に示されているように、HRL体験の意味は、各自の人生の全体性のなかで意味づけられ、再構成された独自の言葉による語りや自伝的記述として表現される基盤にあ

ることが、スタッフ間での「対話」を通して了解された。また、記述の例3から、中里キャンプにおいては、①子どもが主役であり、子どもの主体的な活動を実現すべくスタッフは支える、②ルールといえるのは生命の危険回避のみであり、③子どもとのエピソードではスタッフが捉えた子ども理解に焦点がおかれ、④スタッフ・ミーティングでは発言せずに沈黙の意味も尊重され、研究スタッフ一人ひとりの参加の自由が守られたものであった。

3) 「大人の心的展開なくして子どもの成長はない」に関する記述

記述の例：例1：子どもの行動の意味は、外部の既存の物差しによって判断されるものではなく、そこでの活きた関係性を通して吟味される。HRLが追求している《「生涯発達」の主体的研究》ということには、外的権威からの自由の拡大というテーマが、ひとつの大事なモチーフであったのではないかと(05)。例2：人のもつ感情を受け取りつつ、行動を「関係性」で観るようになった(FM)。例3：「教師の心的展開なくして児童生徒の成長はない」と、先生方に納得していただけるように工夫しながらお伝えしている(IM)。

中里キャンプにおいて、子どもに寄り添い、やりたいことを実現していけるよう支える過程に、この命題の吟味が内包されていた。すなわち、研究スタッフ自身の枠組みが揺さぶられ広げていくことによって、子どもや相手へのより適切な関わりを生み出す可能性が開かれていった。

【考察】

1. 子ども世代協力児(者)および研究スタッフにとってのHRL体験の意味

子ども世代協力者は、HRL体験の意味について、子ども時代をふり返り、自分の内面を探求する姿勢に基づいて日常生活の枠組みとHRL体験とを対比させて考え、日常の暗黙の枠組み、すなわち「常識」にとらわれない生き方を実現していったといえよう。

研究スタッフにとって、HRL体験の意味は各自の人生の全体性のなかで意味づけられ、再構成された独自の言葉による語りや自伝的記述として表現される基盤にあることが、スタッフ相互での「対話」を通して了解された。また、中里キャンプ時での具体的エピソードを振り返った視点は、その後の人生においても様々な出来事のなかで繰り返し吟味され、了解され、他者存在への畏敬の念へと繋がっていったといえよう。

両者の体験の意味との関連をみるために、「子ども世代協力児(5歳時、子ども時代)」から思春期・青年期を経て「子ども世代協力者」への過程における彼らの体験の意味と、各年代での研究スタッフの関わりを時間経過に即してまとめたものが図2である。

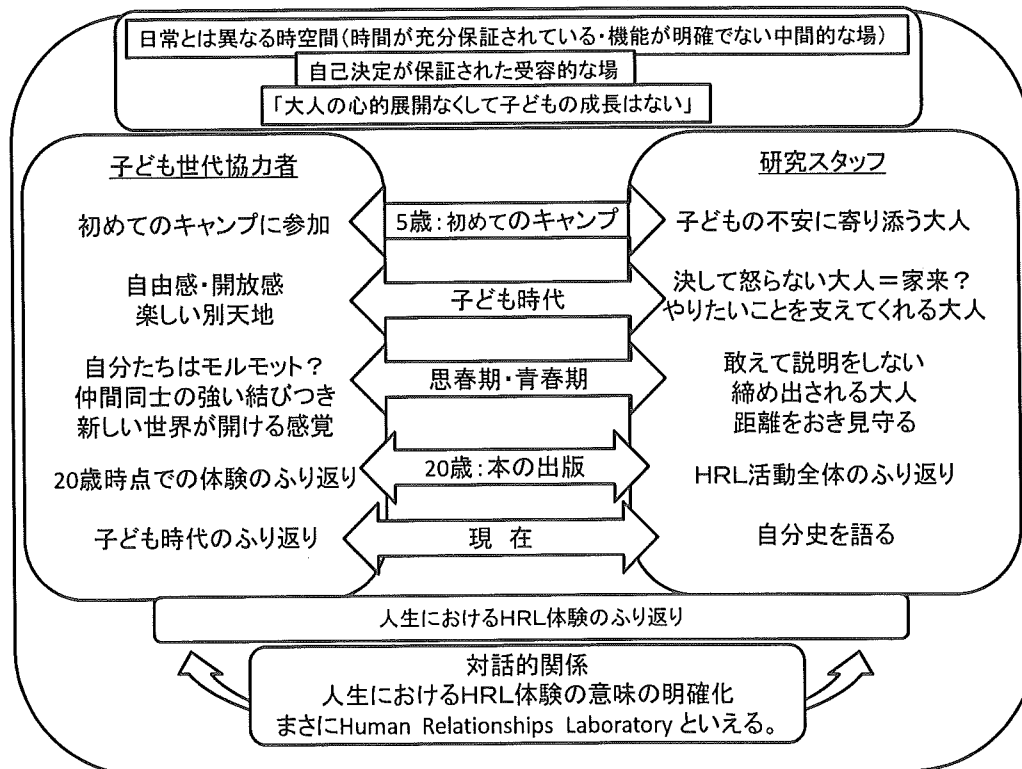


図2 中里キャンプ(人間関係体験の場)における子ども世代協力児(者)の体験と研究スタッフとの関わり

「大人の心的展開なくして子どもの成長はない」という命題のもとに、日常とは異なり時間が十分に保証され、しかも機能が明確でない中間的な生活空間において、一人ひとりの子どもの自己決定から自己実現を保証していくための大人のあり方をスタッフは吟味してきた。HRLのスタッフとして参加したことを契機にその点について省察を続け「スタッフである」から「スタッフとなる」自身の変化は、HRL参加時にとどまるのではなく、その後の人生においても生き続けて、仕事や子育ての基盤となっていたからこそ、自分史のなかで意味づけられていったといえよう。こうした大人の心的展開は、子どもの思春期での「モルモットでは？」という問い直しや反抗・反発を乗り越えて主体的な子ども世代協力者となる要因となったと思われる。さらに子どもたちの生き方や子育てにおいてHRL体験を自身の子どもにもと願うなど、その体験の意味が確かに受け止められ、子ども世代協力者の成長に繋がっていったと思われる。また、こうした子ども世代協力者によって語られ記述されたHRL体験の意味は、親世代協力者から見た子どものHRL体験の意味（杉本・古澤・藤崎・石井、2011）とも重なるものであった。

2. 研究者・協力者関係の質的変化について

1965年に古澤ほかによって着手された母子関係研究は、その後40年以上にわたり研究者と研究協力者との関係は続き、現在に至っている。この間の両者の関係を振り返ると、そこには図3に示されるような関係の質的転換を経ているといえよう。すなわち、1965年に研究者が協力を依頼し、それを受諾した母親との2者間の了解のもとにスタートした関係は、子どもの誕生により親子と研究者との3者関係となった。子どもが幼児期・児童期に至り、中里キャンプを実施するにあたり第2世代が研究スタッフとして加わり、青年期まではデイキャンプ、中里キャンプ、母親グループが展開されていった。そこでの3者の関係は、単なる研究者・協力者関係ではなく、協力母子への支援を考慮に入れた関係へと変容していった。そして、思春期・青年期に達して、子ども世代協力児は研究者との関わりを問い直し、「モルモットでは？」という疑問を子どもたちなりに考え、反発しながらも、中里キャンプにおける研究スタッフとの関わりを通して、自らの意志で子ども世代協力者となっていったといえるだろう。

さらに、1976年よりスタートした第2の縦断研究においても同様の中里キャンプを実施

してきたが、当時大学生になっていた本研究の研究協力児の何人かが第2世代の中里キャンプのスタッフとして参加したことは特記すべきことといえよう。こうして2つの子ども世代協力者が出会い、成人期において不定期な触れ合いを重ねていくなかで、中里キャンプにおける体験の意味を共有するようになってきている。それは、時代を超えて「子どもらしい子ども時代の体験」としての意味があった証と考える。今日、子ども達は自立し、社会人、親としての人生を歩みながら、研究スタッフと研究協力者との対等な対話的關係が現在も継続しているのである。これは中里キャンプを介した育てる・育てられる関係における自伝的再生といえるのではないだろうか（Kaplan,1992）。

3. 子どもらしい子ども時代の体験を保証するために

子ども時代にはどのような体験が大切なのだろうか。それには、大人はどのようなことを配慮すべきなのであろうか。その一つに「大人自身のあり方」を吟味し続けることをあげることができよう。我々は、そうした姿勢を取りつつ40年以上におよぶ生涯的縦断研究を行ってきた。それは、人の生涯的発達を視野に入れた研究者・協力者関係によるコミュニティ形成過程（ハーマンスとケンペン、2010/1993）として展開されたといえるだろう。必然的に研究協力児となった子どもたちが、中里キャンプという「常識を押しつけず寄り添ってくれる大人」との生活を通して、日常の時空間とは異なる十分な時間のなかで自己決定と自己実現が保証され、自分が受け止められ受け入れられた感覚や、そうした生活のなかで育まれた打算のない仲間との出会いを経験した。そこから、主体的な協力者となる確かな意味を見出していた。そして40歳代での振り返りを「意識の捉えの変化」として吟味すると、これらの中里キャンプの体験は、「子どもらしい子ども時代の体験」として彼らに意味づけられ、次世代に受け継がれていったといえるであろう。現代の子どもの取り巻く状況を鑑みると、子どもに関わる大人がその重要性を認識していく必要があると強調したい。

【提言】

「子どもらしい子ども時代」を保証するためには、①子どもにかかわる「大人自身のあり方」を吟味し続けること、②子どもと常識を押しつけずに寄り添う大人との生活体験、すなわち、

十分な時間のなかで自己決定と自己実現が十分に支えられ、自分が受け入れられたという感覚がもてること、そして、③打算のない仲間との出会いと相互の対話が尊重されること、が大

切であるといえよう。そこでは、機能が明確でない環境において、ともに育ちあい変化する姿勢が特に大人に求められていると思われる。

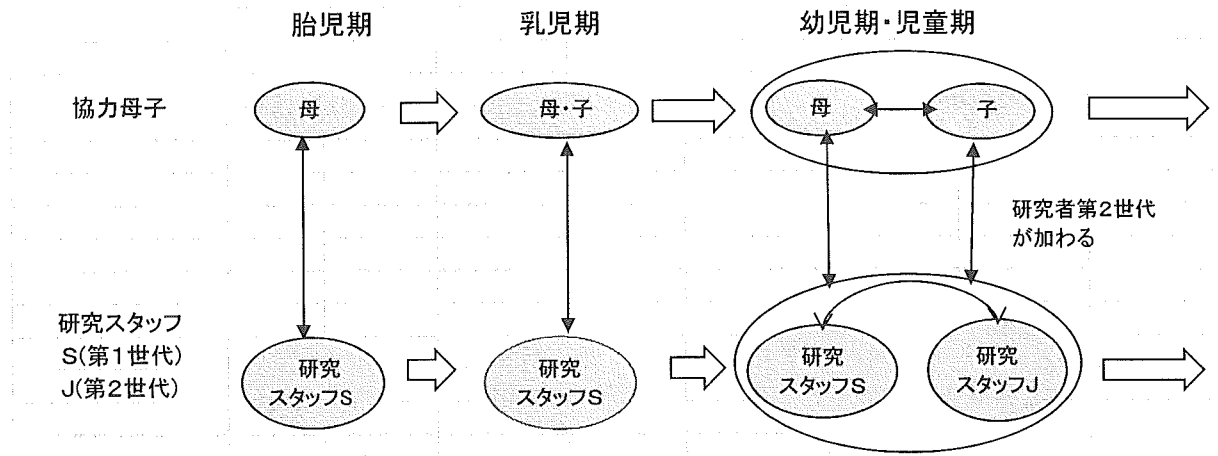


図 3-1 HRL における研究スタッフと協力母子との関係の変遷 (児童期まで)

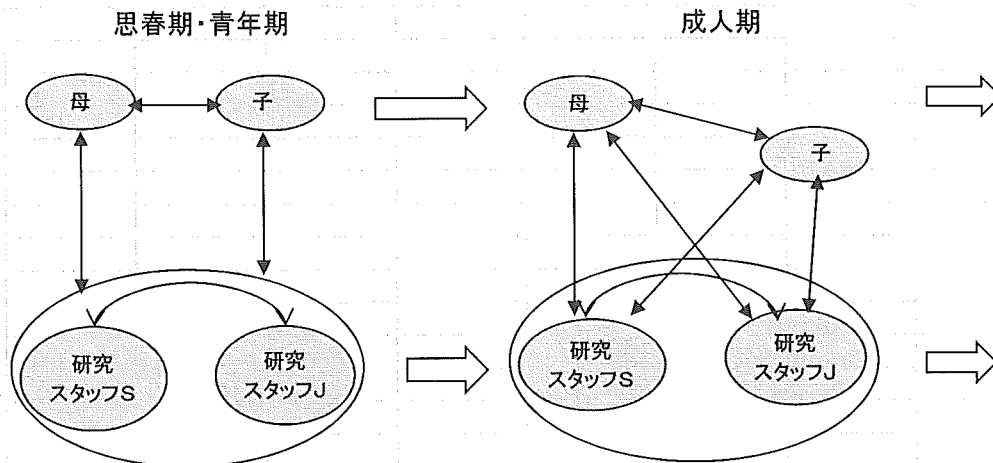


図 3-2 HRL における研究スタッフと協力母子との関係の変遷 (思春期から成人期まで)

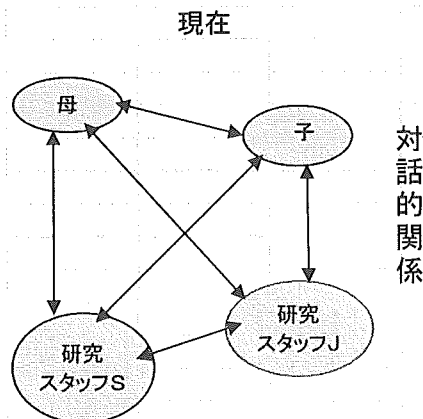


図 3-3 HRL における研究スタッフと協力母子との関係の変遷 (現在)

【引用文献】

- ベッテルハイム, B. 1968 村瀬孝夫・村瀬嘉代子(訳) *愛はすべてではない 誠信書房* (Betelheim, B. 1965 *Love is not enough*. New York: The Macmillan Company)
- 藤崎眞知代・古澤頼雄 2009 発達初期からの母子関係に関する縦断研究とその後の方法論的展開 三宅和夫・高橋恵子(編著) *縦断研究の挑戦—発達を理解するために* 金子書房 178-195.
- 藤崎眞知代・古澤頼雄・杉本真理子・石井富美子 2011 生涯的縦断研究における研究者・協力関係の質的分析—その1: 研究スタッフにとっての体験の意味. *日本発達心理学会 第22回大会発表論文集*. 388.
- 藤崎眞知代・杉本真理子 2011 40年にわたる生涯的縦断研究(HRL: 中里キャンプ)を振り返って—研究者・スタッフにとっての体験の意味
- 藤崎眞知代・杉本真理子 2012 40年にわたる生涯的縦断研究(HRL: 中里キャンプ)を振り返ってII—研究者・スタッフにとっての体験の意味
- 藤崎眞知代・杉本真理子・石井富美子 2012 生涯的縦断研究における研究者・協力関係の質的分析—その3: スタッフにとっての体験の意味の共通性・独自性. *日本発達心理学会第23回大会発表論文集*. 494.
- 藤崎眞知代・杉本真理子 2013 40年にわたる生涯的縦断研究(HRL: 中里キャンプ)を振り返ってIII—研究者・スタッフにとっての体験の意味.
- ハーマンス, H.・ケンペン, H. 2006 溝上慎一・水間玲子・盛岡正芳(訳) *対話的自己—デカルト/ジェームス/ミードを超えて* 新曜社 (Hermans, H., & Kempen, H. 1993 *The dialogical self*. Elsevier.)
- Kaplan, M.M. 1992 *Mother's images of motherhood: Case studies of twelve mothers*. London: Routledge.
- 古澤頼雄 1966 親子関係の形成過程に関する研究 I *日本心理学会第30回大会論文集* 315.
- 古澤頼雄 1986 *見えないアルバム* 彩古書房.
- 古澤頼雄・藤崎眞知代・赤津純子・柏木恵子 1991 3歳時・10歳時における母子言語交渉 *日本教育心理学会第33回総会発表論文集* 131.
- 古澤頼雄 1995 今後の研究の展望と方法論 南博文・やまだようこ(編) *講座生涯発達心理学5 老いることの意味—中年・老年期* 金子書房. 189-208.
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島悟・佐藤達哉・向井隆代 1999 子どもの問題行動の発達: Externalizingな問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から *発達心理学研究* 10 32-45.
- 杉本真理子・上野礼子(編著) 2007 「*見えないアルバム*」刊行のための寄稿集—HRL 40年の歩み あかつき印刷
- 杉本真理子・古澤頼雄・藤崎眞知代・石井富美子 2011 生涯的縦断研究における研究者・協力関係の質的分析—その2: 親世代協力者の体験の意味. *日本発達心理学会第22回大会発表論文集*. 389.
- 杉本真理子・藤崎眞知代・石井富美子 2012 生涯的縦断研究における研究者・協力関係の質的分析—その4: 子ども世代協力者の体験の意味. *日本発達心理学会第23回大会発表論文集*. 495.
- 杉本真理子・藤崎眞知代・石井富美子 2013 生涯的縦断研究における研究者・協力者関係の質的分析—その6: 子ども世代協力者による語りからの検討 *日本発達心理学会第24回大会発表論文集* 527.
- Sroufe, L.A., Egeland, B., Carlson, E.A., & Collins, W.A. (Eds.) 2005 *The development of person: Minnesota Study of risk and adaptation from birth to adulthood*. New York: Guilford.
- やまだようこ 2012 *世代をむすぶ* 新曜社

注1: 本研究の一部は2009年度・2010年度・2011年度科学研究費補助金「生涯的縦断研究における研究者・協力者関係に関する研究—両者にとっての体験の意味」の助成を受けた。

注2: 本論文の一部は、日本発達心理学会第22回~24回大会においてポスター発表したものである。